

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 93

2024.5.31 発行

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

93回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ：『シャッター商店街は復活できるか—中学生の提言から—』

—鳥居松地域を中心にして考える—

講師：河地 清 氏（「ふるさと春日井学」研究フォーラム会長）

4月28日（日）「商店街」は、やがて消滅していくべき過去の遺物であり、すべて郊外ショッピングモールにとって代わられる存在なのであろうか。活気や賑わいのある中心市街地といったものは、ノスタルジーにすぎないのだろうか。商店街は、過去の遺物ではなく、新たな動きがみえはじめている。若い世代がカフェやコワーキングスペースなどコミュニティの拠点として商店街に関心を向け、車で買い物に行くのが難しい高齢世代が商店街に足を向ける流れも出てきた。（広井良典編『商店街の復権—歩いて楽しめるコミュニティ空間—』より）

春日井市の中心市街地の一つである「鳥居松商店街」を活性化する研究発表を春日井市立東部中学校 3 年生（令和 5 年度生）が行いました。指導された先生の許可を得て当会で発表させていただきます。若い感性と発想が新鮮で目から鱗の提案が多く見られます。

市から、森本邦博教育部長、文化財課浅田博造氏の出席を得て、市民 10 名の参加者がありました。

とりいまつギャラリー 街角メッセージ展示



街灯を活用（208期318枚）

市長・市議会議長・警察署長揮毫のステッカーも貼付されている。

2024/4/18



「街角メッセージ」と商店街風景

《発表要旨》

はじめに

「地域の活性化」を進める方法論として、兎角理論的方法論に依拠して進められることが従来までの考え方としてあった。各地域で様々な取り組みが行われてきた。今も進行形で実践されている。今日まで、色々な実践例を見てきて一つの共通点を見いだすことが出来る。「論より実践」である。まず実践を優先して取り組むことである。各地域、地域で地域の歴史、文化、コミュニティの在り方、地域の伝統風習が違うので、一律に理論的定式を当てはめることは出来ない。地域の特色、魅力を最大限に引き出しながら、地域協働で取り組まなければ成果は上がらない。

私の見解と、理論的先行研究を紹介して、鳥居松地域の実践を改めて紹介し、今回は、地域の中学生（春日井市立東部中学校令和5年度卒業生「社会科総合学習」「鳥居松商店街は復活できるか」）の研究発表を付け加えることにより、これからのこの地域の再生復活の未来を考える貴重な資料にした。

I. 「ふるさと意識なくして地域活性化なし」

拙稿、修文大学紀要 (Bulletin of Shubun University) , No. 8, pp.133-160 (2016) 論文で、『地域振興・地域活性化の基本的考え方とは何か. 「ふるさと」概念と「地域創生」「地域再生」とはどのように関連しているのか. 従来の「まちづくり」概念と新しい発想による「まちづくり」の発想とはどのように違うのか. 「地域活性化」の方法を巡って今日まで多くの先行事例や先行研究が提起されてきている. しかし, 定式化した実践や理論は示されていない. 従来の経済理論だけでは「地域活性化」の方法を定式化してゆくことは出来ない. 特定地域の歴史, 文化, 自然を総合的な視点で捉える価値観と, 地域を構成している人々の内発的意識 (ふるさと意識) の醸成の基盤の上で「地域活性化」の問題を考察することが本質的方法ではないかと考えるからである. 本論文は, 市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践活動を通じて「地域活性化」の要件となる証言資料, 実践的知見, 検証等をもとに, 「地域活性化」の本質的方法論を試論した実践報告論文である. キーワード: 「ふるさと意識なくして地域活性化なし」地域活性化, ふるさと学ふるさと意識の醸成』であることを述べた。ふるさと意識醸成の活動は、市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムによって現在継続中である。鳥居松地域は、5つの商店街（鳥居升商店街振興組合、広小路障害組合、下街道商店会、春日井駅前商店会、鳥居松銀杏並木商店組合）の集積する商業圏地区である。地域のまちづくりも、この地域の特色、魅力を生かした取り組みが定式化どおりの実践になる。この10年来は、鳥居松商店街振興組合が中心となって、市のランドマークである「書のまち春日井」の特色を生かす実践に取り組んでいる。今年で12年目なる「街角メッセージ」の実践である。地盤沈下、シャッター街化してゆく地域に元気と活力を取り戻し、新しいまちづくりのきっかけになればと始められた取り組みである。地域の特色・魅力を生かした地域の人たちの内発的発想によるものである。

毛筆で書かれた言葉をステッカーにして、約300の街路灯に貼付して、行き交う人々に見

てもらおうというもの。メッセージ性のある言葉の力と毛筆の力が人々の心と意識に影響を与えているのかは、検証する必要があるが、「書のまち春日井」ならではの特色あるとりくみとして注視されている。当初は、地域学区内の八幡小学校6年生に卒業記念として全員に揮毫してもらうことから出発した事業は、今日、市内の高等学校書道部7校中部大学書道部、春日井警察署内書道愛好者の署員、春日井市長、市議会議長と広がりをつくりはじめている。

II. 地域活性化の先行研究（理論）

地域の活性化に関する先行研究を一通り概観しておきたい。そして、今後の方向性を整理してみた。

- 1) 本間義人『まちづくりの思想—土木社会から市民社会へ—』有斐閣選書 1994年
・国主導のまちづくりから地方主体のまちづくりへ意識・発想をかえなければ成らない
- 2) 田村 明『まちづくりの実践』岩波新書 2013年 ・地域の価値とは何か。地域の価値＝資産・資源を生かしたまちづくりでなければならない。
- 3) 月尾嘉男『縮小文明の展望—千年の彼方を目指して—』東京大学出版会 2003年
- 4) 月尾嘉男『情報社会のまちづくり』「ふるさと春日井学」研究フォーラム講演（2014.4）・明治維新以来の画一主義、経済至上主義からの転換を迫られている。

「吾唯知足」の精神がなければ社会を変えて行くことは難しい。意識を変えなければならない。

- 5) 池上 惇『文化経済学すすめ』丸善ライブラリー 1993年・J.ラスキンの経済学、価値観（文化、芸術）を享受できる社会の仕組み
- 6) 足立基浩『イギリスに学ぶ商店街再生計画—シャッター通りを変えるためのヒント—』ミネルヴァ書房 2013年 ・徹底した SWOT 分析 ・個性を生かした都市再生
- 7) 足立基浩『シャッター通り再生計画—明日からはじめる活性化の極意—』ミネルヴァ書房 2010年・今までの「まちづくり」政策・考え方→経済効率優先、理論優先、便益主義・「リスク最小化の原則」に依拠。費用対効果、cost 最小化の考え方。・「コンサルに計画素案を作成を頼む」の法則・「何がやりたいのではなく、補助金を使いきらなければならない」の法則・「その結果、『とりあえず、何かやっておく』」の法則・「金が出れば知恵が引っ込む、法に守られれば努力をしなくなる」は名言である。）
- 8) 足立基浩『まちづくりの個性と価値—センチメンタル価値とオプション価値—』ミネルヴァ書房 2009年・「これからのまちづくりには個性的なまちづくりがもためられるが、これには勇気が必要」・個性的なまちづくりを行う（地域性重視の個性創造＝センチメンタル価値）・明確な状況診断を行う（SWOT分析）Strengths Weaknesses Opportunities Threats・リスクを緻密に計算する（リスク回避のためにオプション（選択肢）を用意す） その地域にふさわしい政策手段を選ぶ（手法の妥当性を重視する）

9)日本建築学会編『中心市街地活性化とまちづくり会社』丸善、2005年、

- ・長い時間によって生み出された景観や暮らしが色濃く息づいているのは都市の中心市街地である。・・・・・・都市の均質化は、都市が記憶を喪失することに他ならない。(17頁)・リスクを緻密に計算する(リスク回避のためにオプション(選択肢)を用意する)その地域にふさわしい政策手段を選ぶ(手法の妥当性を重視する)・観光化は、テーマパーク型よりも自然体の歴史・文化・伝統を中心にするべきである。・今後の中心部の商業再生には、景観や地域の食材など個性を生かして地域内交流人口を増加させ、観光客を呼び込む手法が必要である。旧まちづくり三法は何ら貢献しなかった。(足立基浩『前掲書』)
- ・伝統的景観は都市の個性を示す一つのバロメーターである。
- ・商業地の地価に関しては、景観形成団体のある街のほうが地価の下落率が低い。・シャッター通り化をもたらした要因の一つは郊外型店舗の無秩序な開発にある。・都市の活性化は、「経済効果としての活性化」「文化や伝統を育む中での活性化」という二つのベクトルがある。(足立基浩『前掲書』)・新まちづくり三法と春日井市第六次総合計画(地域資源の重視)

10)ジェイコブ『アメリカ大都市の死と生』(山形浩生訳 鹿島出版会 2010年)

- ・複雑性、多様性 街のごちゃごちゃ感こそが街に賑わいを生み出している。
- ・経済学は、まちづくり像に対しても「収益性」を一つのものさしとして見ようとするとところがある。

11)西村幸夫『西村幸夫風景論ノート』鹿島出版会、2008年(208頁)

- ・都市再生は、再開発型の物的環境改善一本槍では達成することはできない。
- ・西村の都市再生論では、「歴史や文化」が必要条件として語られておりそれは言うまでもなく、街のアイデンティティ創出と関連している。

12)足立正範・中野みどり・鈴木俊治『中心市街地の再生メインストリートプログラム』学芸出版社、2006年、23頁)

- ・公示地価は、旧街づくり三法導入後以降、すべての規模の都市において大きく下落している。全体として年に平均で7.7%も下落しているのだ。(P24) ・公示地価は、旧街づくり三法導入後以降、すべての規模の都市において大きく下落している。・全体として年に平均で7.7%も下落しているのだ。(P24) ・伝統的景観は都市の個性を示す一つのバロメーターと考えられる。(P30) ・商業地の地価に関しては、景観形成団体のある街の方が地価の下落率が低いことがわかった。・2006年5月施行新「まちづくり三法」スタート。シャッター通り化をもたらした要因の一つは、郊外型店舗の無秩序な開発にある。・イギリスでは商品が競合しておらず「住み分け」がなされている。郊外型店舗にはないような

魅力づくりを行はねばならない。・都市の活性化には、「経済効果としての活性化」と「文化や伝統をはぐくむ中での活性化」という二つのベクトルがある。(P33)

- 13) 大塚俊幸 (2007. 10) 「都市中心部における生活拠点の再生」(林 上編著『現代都市地域の構造再編』・人口 30～40 万の中規模都市であっても、住むことを考え、歴史・文化を重視した都市づくりを一層推進し、心豊かに市民生活を送れる拠点として再編してゆくことである (P226)
- 14) 上野美咲『地方版エリアマネジメント』日本経済評論社 2018. 7
- 15) 新 雅史『商店街はなぜ減びるのかー社会・経済・経済史から探る再生の道ー』光文社新書 2012 ・商店街は減びない、持続可能な商店街の再生を考え
- 16) 河地 清『「地域活性化」の本質的方法試論ー「ふるさと春日井学」研究フォーラム実践の検証ー』修文大学研究紀要 2016. 2 日本産業科学学会全国大会発表 2018. 8
- 17) 春日井市『春日井市第六次総合計画 2018～2037 私たちの未来図』・第 4 部 総合計画の実現に向けて 第 1 章「地域資源を活用した活力の創出」3. 地域資源を活用した活力の創出「地域の歴史や良好な景観など本市の特性や魅力といった地域資源を最大限に活かし、誰もが愛着と誇りを持って住み続けることができるまちづくりを進めます。」(P71)
- 18) 服部博昭編集・企画『春日井市商店連合会創立 70 周年記念誌-商いの種は百花繚乱-』春日井市商店連合会 2022. 5
- 19) 検索サイト『ふるさと春日井学』研究フォーラム <http://kasugai.genki365.net/>

まとめー中学生の提案ー

20) 資料提供：春日井市立東部中学校総合学習「鳥居松商店街は再生できるか」研究発表令和 5 年度卒業生 ・提案の一部を掲載（・今の商店街の現状をしることが出来た。お金の面や後継者の問題など実行できない問題があることを知った。もっと商店街を活用して行けば改善して行けると思った。・商店街ならではのものをつくりだし、活性化してゆく。それぞれの班の発表を聞いて下さり、商店街のことを真剣に考えているという姿勢が伝わって来ました・若者や高齢者が集まれる商店街を考える。学習できる場、地域の人が交流できる場（学習室・カフェ）、駐車場より駐輪場を空き店舗利用する。金銭的な問題があることがわかった。・地域の強みを活かせるような取り組みが復興に繋がっていくのではないかと考えた。持続可能性、実現可能性、一番適切な案は何かを話し合いたい。シャッターを有効活用する。・「お金はどこが出すんだ」という言葉でガツンと頭を殴られたような感覚がした。）

シャッター商店街再生の理論と実践についての（資料ー引用文献ー）から共通の解を見出すことができる。商店街を中心にして地域活性化には定式化された方法論はなく特効薬はないとされてきたが、実践を通して一つの方向性を見ることが

できる。中学生の提案は、新鮮で、バイアスの掛かっていない、純粋で重要な指摘が幾つもあった。今後の参考にして行くべきだ。(記録・編集：河地 清)

OPINION

「ふるさと意識なくして地域活性化なし」の熱が伝わった有意義な対談 文化・歴史行政について意見を述べた

春日井市の石黒直樹市長が市民と直接対話する本年度1回目の「市長と語る会」が24日、市役所であり、市内の郷土史研究者らでつくる「ふるさと春日井学研究フォーラム」と市の活性化などについて意見を交わした。

語る会には、地域に根ざした研究や勉強会などに取り組む同フォーラムの河地

清会長ら4人が出席した。河地会長は「歴史、文化、自然を基盤にした考え方がないと地域を愛せない」と指摘し、地域の特色を生かした活動が活性化に必要なとした。

例として、出席者のひとり、書のまち春日井らしさをこそと書でしめたためメッセーシのステッカーを電柱などに掲示する鳥居

「歴史、文化、自然を基盤に」
郷土史研究者ら 市長と語る会



石黒市長と語り合った河地会長ら＝春日井市役所で

松商店街の取り組みを紹介。「書のまち春日井ならアドバンテージの助成金をつけたら」と提案した。また、解体が決まっている市立郷土館(鳥居松町)が話題に上がった。石黒市長は耐震性の問題から解体方針を踏襲するとしつつ「下街道やその土地の歴史をしっかりと後世に伝える必要はある」と思っている。そういった場所につくり変えるように、詳細な検討を始める」と語った。(長谷川和華)

中日新聞記事 (2024.5.29)
令和6年5月24日(金)市長との対談の様子、参加者：河地 清、鳥居洋治、野田淑人、長谷川久幸 (ふるさと会員) 4名

春日井活性化へ 未来見据え

「ふるさと春日井学」研究フォーラムの日頃の活動を評価していただき、市長との対談の機会を与えて頂いた、市当局に対して厚く御礼申し上げます。93回のフォーラムで集積された参加者からの意見要望をストレートに出せた対談でした。事前に文化、歴史、自然、まちづくりに関する13項目の事項について市長には関係資料をお渡しし把握していただいた。1時間という時間の制限もあり、明確な回答は、下街道の歴史を残すことと、「書のまち春日井」と鳥居松商店街の「街角メッセージ」の取り組みについてへの理解についてに限られてしまいましたが市長からは明確な方向性を示す答えを得ることが出来、有意義な対談でありました。(文責：河地 清)

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学 検索